

## 社会学部報

### ◇学部講演会および研究会

- 1997年10月15日(水)(研究会例会)  
奥野 卓司 教授  
「第三の社会の浮上  
—情報化による家庭と産業の変容調査から—」
- 1997年12月17日(水)(研究会例会)  
久保田 稔 教授  
「疾病の予防、治療戦略  
—糖尿病の研究・臨床をふまえて—」
- 1998年3月27日(金)(研究会特別例会)  
講師 オギュスタン・ベルク氏  
フランス国立社会科学高等研究院  
現代日本研究所教授  
「今日における場所の問題」

### ◇社会学部教職員人権問題研修会

- 1997年11月12日(水)  
講師 森田 ゆり氏  
日本CAPトレーニングセンター代表  
「エンパワーメントと人権」

### ◇海外出張

- 宮田 満雄 教授  
10月14日から10月17日まで  
ACUCA(アジアキリスト教大学協会)セミナー開催に際し会長として出席するため、インドネシアへ
- 荻野 昌弘 助教授  
10月23日から10月27日まで  
国際シンポジウム「場所の論理と近代の超克」において報告するため、フランスへ
- 立木 茂雄 教授  
11月1日から11月12日まで  
国際トラウマストレス研究学会第13回大会シンポジウムにて発表を行うため、カナダへ
- 対馬 路人 教授  
11月13日から11月17日まで  
済州学会出席及び現地調査のため、韓国へ
- アラン・ブレイディ 助教授  
11月14日から11月16日まで

TESOL 第15回学会において報告を行うため、スコットランドへ

- アラン・ブレイディ 助教授  
12月3日から12月7日まで  
International ELT Conferenceで報告するため、トルコへ
- 鳥越 皓之 教授  
12月16日から12月23日まで  
「社会学実習I」の現地実習担当のため、韓国へ
- 高坂 健次 教授  
1月6日から1月10日まで  
ISA-RC28(International Sociological Association Research Committee)及び国際社会学会「社会階層」研究部会に出席し報告するため、台湾へ
- 船本 弘毅 教授  
1月12日から1月15日まで  
アジア・太平洋キリスト教学校連盟の総会に出席し、基調講演を行うため、韓国へ
- 谷 直子 専任講師  
3月18日から3月22日まで  
国際関係学会の研究発表のため、アメリカへ

### ◇新刊書紹介

- 八木 克正 教授(分担執筆)  
「英語音声研究の実際—transcriptionの方法と分析」  
『英語音声学』  
英語音声学会 1997.6
- 奥野 卓司 教授(共著)  
『起業家養成講座』  
ダイヤモンド社 1997.7
- 久保田 稔 教授(分担執筆)  
「NIDDMのインスリン療法」  
河盛 隆造 編  
『メディカル・コア診療プラクティス  
新 糖尿病の薬物療法—最近の治療法と患者管理—』  
日本医学中央会 1997.7
- 立木 茂雄 教授(分担執筆)  
「A LIFE-MODELLED SOCIAL WORK  
PRACTICE WITH EARTHQUAKE VIC-

TIMS: PHASE SPECIFIC RESPONSES  
DURING CRISIS AND POST-CRISIS PER-  
IODS」

『5th United States / Japan Workshop on  
Urban Earthquake Hazard Reduction』  
Earthquake Engineering Research Insti-  
tute 1997.8

- 浅野 仁 教授 (共編)  
『高齢者福祉』  
有斐閣 1997.9
- 藤戸 淑子 教授 (監修)  
『日本語能力試験1級合格の漢字・熟語4740』  
凡人社 1997.9
- 船本 弘毅 教授 (単著)  
『聖書の世界—旧約を読む』  
創元社 1997.11
- 船本 弘毅 教授 (単著)  
『聖書の世界—新約を読む』  
創元社 1997.11
- 宮原浩二郎 教授 (共編)  
『変身の社会学』  
世界思想社 1997.12
- 荻野 昌弘 助教授 (共編)  
『変身の社会学』  
世界思想社 1997.12
- 立木 茂雄 教授 (プロデューサー)  
CD-ROM『阪神・淡路大震災証言 ボラン  
ティア編・被災者編』  
一期一会 1997.12
- 高田 真治 教授 (編集、分担執筆)  
日本地域福祉学会 編  
『地域福祉事典』  
中央法規出版 1997.12
- 久保田 稔 教授 (分担執筆)  
『図解 糖尿病の治療』  
主婦の友社 1997.12
- 八木 克正 教授 (分担執筆、校閲)  
『小学館プログレッシブ英和中辞典』  
小学館 1998.1
- 立木 茂雄 教授 (原作・プロデュース)  
『カナダのボランティアリズム—公共性は市  
民がつむぎ出す—』  
松下電器・一期一会 1998.1

## 学会消息

### ◇ファジィ学会

○6月4日～6日に富山大学で、ファジィ学会  
が開催され、高坂健次教授は「社会学におけ  
るファジィ理論の応用可能性について」と題  
して講演を行った。

### ◇「21世紀における高等教育のための国民的戦略 と地域協力」会議

○7月8日～10日に国際連合大学で「21世紀に  
おける高等教育のための国民的戦略と地域協  
力」会議が開催され、高坂健次教授はラウン  
ドテーブルにおいて“Towards a Post-Lea-  
rning Society”と題する報告を行った。

### ◇行動計量学会

○9月4日～7日に東北大学で開かれた行動計  
量学会の特別シンポジウム「現代社会の計量  
分析」において、高坂健次教授は司会をつと  
めた。

### ◇職業安全と健康会議 (ICOS)

○9月10日～15日に中国で開催された「職業安  
全と健康会議 (ICOS)」に、本学から、杉山貞  
夫教授と高坂健次教授が出席し、高坂教授は  
「外国人労働者の労働災害について」報告を  
行った。

### ◇アジア太平洋社会学会

○9月17日～20日にアジア太平洋社会学会大会  
がクアラルンプールで開催され、高坂健次教  
授は日本代表組織運営委員として出席し、ま  
た「理論、文化と日本」部会の司会をつとめ  
た。なお、この大会で規約等が承認され、高  
坂教授は学会理事に選出された。

### ◇国際社会学会東京会議

○9月24日に国際社会学会東京会議が東京大学  
で開催され、本学からは鳥越皓之教授と高坂  
健次教授が出席し、高坂教授は“The Great  
Hanshin Earthquake:Steps for Renewal

and the Role of Sociology”と題する講演を行った。

#### ◇社会経済システム学会

- 10月1日～2日に関西大学で社会経済システム学会大会が開催され、本学からは高坂健次教授と田並尚恵研究員とが出席し、高坂教授は「21世紀の技術と社会」と題するシンポジウムにおいてパネリストをつとめた。

#### ◇日本英語コミュニケーション学会

- 第6回全国大会が1997年10月10日、早稲田大学で開催された。午前中、八木克正教授の司会とコーディネーションでシンポジウム「英語コミュニケーション学へのアプローチ」が行われた。このシンポジウムは「英語コミュニケーション」を学問的にどう捉えるか、何を研究・教育するのが英語コミュニケーションであるのかについてのひとつの考え方を示すために企画されたものである。基本的な考え方は、英語を研究し教育するかという観点、コミュニケーションをどう捉え教育するかという観点を基礎に、(1) 英語の研究は伝統的な文法研究から発信型の文法教育へ(近畿大学助教授奥田隆一)、そして(2) 新しい学問として「言外の意味」「アイロニー」文字通りでない言葉の意味の研究(関西大学助教授山本英一)、(3) 情報処理の手法を利用したテキストの構造をさぐる研究(帝塚山短期大学助教授梅咲敦子)、(4) 新しい学問であるコミュニケーション論を基礎にした新しい観点からの英語教育(帝塚山短期大学助教授北本晃治)がそれぞれ報告を行った。その後さまざまな観点からの議論があったが、ひとつの新しい「英語コミュニケーション」の捉え方をあきらかにした。総会の後、午後、3室で合計12の研究報告が行われた。

#### ◇日仏社会学会

- 1997年度日仏社会学会大会が、1997年10月18日(土)奈良女子大学において開催された。本学からは荻野昌弘助教授がシンポジウム「制度としての文化財と博物館」で司会をつ

とめた。

#### ◇Colloque international

- “Logique du lieu et dépassement de la modernité” 上記国際会議が、1997年10月23～25日パリの日本文化会館において開催された。本学部からは荻野昌弘助教授が“Nationalisme, Colonialisme, guerre: la dimension politique du ‘dépassement de la modernité’ ”と題して報告した。

#### ◇第70回日本社会学会

- 11月8日～9日に第70回日本社会学会が開かれ、本学部から多数が参加した。鳥越皓之教授は「阪神・淡路大震災の社会学」に関するシンポジウムでパネリストをつとめ、高坂教授は「階層・移動研究部会」の司会をつとめた。また、この大会を期に、鳥越教授は理事を退任し、高坂教授は新たに理事に選出された。

#### ◇日本英語学会

- 第15回大会が1997年11月23日、24日、東京都立大学で開催された。7つのワークショップに続き、6つのシンポジウムと28の研究発表が行われた。第二日目に、シンポジウム「語法研究の新展開」(司会、神戸市外国語大学教授和田四郎)が行われた。コンピュータを利用した新しい corpus linguistics の立場(京都外国語大学教授赤野一郎)、言語理論と語法研究の接点を求める語法研究という立場(筑波大学助教授安井泉)から何ができるのか、言語理論を応用した新しい語法研究のあり方の具体的な研究報告として疑問副詞 why のさまざまな特性についての研究(八木克正教授)の3つの報告ののちに活発な討論があった。

#### ◇日本大学英語教育学会(JACET)

- 1997年12月13日、大学英語教育学会の辞書研究グループはワークショップを、京都外国語大学で開催した。4室に別れ、それぞれ10づつ、合計40の研究報告があった。報告は辞書

を出版している出版社の代表、辞書編集者、英語教育にたずさわる人たちなど多様な立場からの報告があった。八木克正教授は第2室の3人の司会者のひとりとして出席、同時に研究報告者のひとりとして、「形容詞型の表示とその問題点：形容詞型の研究はなぜ進まないか、また、辞書における形容詞型の表示は可能か」を報告した。

#### ◇第7回日本移民学会

○12月13、14日の両日、第7回日本移民学会が、「移民研究の現状と課題」と題するシンポジウムのテーマのもと、100名を超える参加者をえて、B号館で開催された。牧正英学部長が歓迎の挨拶を述べ、山本剛郎教授が大会実行委員長を務めた。

#### ◇階層・移動研究部会

○1998年1月7日～9日に台湾で開催される国際社会学会の「階層・移動研究部会」大会に、高坂健次教授が出席し、“Strata within Strata”と題して研究発表を行った。

#### ◇ISSP（国際社会調査プログラム）

○ISSPの1998年度国際会議が1月25日～28日の4日間、フィリピン・マニラのマニラ・ミッドタウン・ホテルにおいて開催された。今年度は、世界の26ヶ国の代表が参加し、ISSPのデータにもとづくデータ解析の研究発表とともに、1999年度の「社会的不平等」、2000年度の「環境問題」の調査内容の検討・作成がなされた。本学の真鍋一史教授はNHK世論調査部とともに会議に参加し、「ISSPのデータの国際比較のためのFacet Theory Approachの応用の試み」と題する研究発表をし、さらに「環境問題」の質問原案作成委員会のメンバーとしての共同作業を担当した。



執筆者紹介(掲載順)

牧 正 英	関西学院大学社会学部教授	奥 野 卓 司	関西学院大学社会学部教授
杉 山 貞 夫	関西学院大学社会学部教授	難 波 功 士	関西学院大学社会学部専任講師
倉 田 和 四 生	関西学院大学名誉教授	八 木 克 正	関西学院大学社会学部教授
佐々木 薫	関西学院大学社会学部教授	岡 田 弥 生	関西学院大学社会学部助教授
藤 原 武 弘	関西学院大学社会学部教授	藤 井 美 和	Washington University, George Warren Brown School of Social Work
池 内 裕 美	関西学院大学大学院 社会学研究科博士課程後期課程	Harumi Befu	京都文教大学教授
脇 本 忍	ECCコンピュータ学院非常勤講師	真 鍋 一 史	関西学院大学社会学部教授
高 田 茂 樹	関西学院大学情報処理センター助手	岩 本 茂 樹	関西学院大学大学院 社会学研究科博士課程後期課程

社会学部研究会会員

会 長	牧 正 英							
運 営 委 員	浅 野 仁	森 川 甫	津 金 沢 聡 廣					
	安 藤 文 四 郎	川 久 保 美 智 子	三 浦 耕 吉 郎					
会 計 監 査	中 山 慶 一 郎	宮 田 満 雄						
書 記	土 屋 明 生							
名 誉 会 員	本 出 祐 之	半 田 一 吉	J. A. ジョイス					
	小 関 藤 一 郎	倉 田 和 四 生	萬 成 博					
	中 野 秀 一 郎	西 尾 朗	西 山 美 瑳 子					
	岡 村 重 夫	領 家 穰	嶋 田 津 矢 子					
	杉 原 方	清 水 盛 光	田 中 國 夫					
	(A. B. C 順)							
普 通 会 員	杉 山 貞 夫	武 田 建	牧 正 英					
	佐々木 薫	森 川 甫	張 光 夫					
	中 山 慶 一 郎	宮 田 満 雄	船 本 弘 毅					
	津 金 澤 聡 廣	春 名 純 人	紺 田 千 登 史					
	村 川 満	真 鍋 一 史	山 路 勝 彦					
	山 本 剛 郎	高 田 真 治	鳥 越 皓 之 仁					
	荒 川 義 子 次 夫	安 藤 文 四 郎	浅 野 路 人					
	高 坂 健 次 夫	石 川 明	對 馬 武 弘					
	芝 田 正 夫	芝 野 松 次 郎	藤 原 茂 雄					
	宮 原 浩 二 郎	藤 戸 淑 子	立 木 武 茂					
	田 中 耕 一	居 樹 伸 雄	八 木 克 正					
	奥 野 卓 司	久 保 田 稔	大 谷 信 介					
	A. ブレイディ	川 久 保 美 智 子	荻 野 昌 弘					
	三 浦 耕 吉 郎	R. M. グルーベル	岡 田 弥 生					
	谷 直 子	難 波 功 士	野 波 寛					

## 関西学院大学社会学部研究会会則

### 第1章 総 則

#### 第 1 条

本会は関西学院大学社会学部研究会と称する。

#### 第 2 条

本会は本学部における社会学と関連諸科学の教育・研究の推進を計ることを目的とする。

#### 第 3 条

本会は事務局を西宮市上ヶ原一番町1—155 関西学院大学社会学部内におく。

### 第2章 事 業

#### 第 4 条

本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究会などの開催
2. 機関誌「関西学院大学社会学部紀要」などの刊行
3. 会員相互の研究・教育に関する連絡および協力
4. 本学部の教育・研究に対する協力
5. 国内外関係諸学会との協力
6. その他本会の目的を達成するために必要な事業

### 第3章 会 員

#### 第 5 条

本会の会員は次のとおりとする。

1. 名誉会員 本会に功労のあったもので、本会の推薦するもの
2. 普通会員 本学社会学部専任の教授、助教授、講師および助手
3. 賛助会員 本会の趣旨に賛同するもの

### 第4章 運営組織

#### 第 6 条

第2章記載の事業を行うため、本会には以下の委員、委員会等をおく。

1. 会長は当該年度の社会学部長とし、本会には以下の委員、委員会等をおく。
2. 運営委員（6名）：運営委員は普通会員の中から互選し、運営委員会を構成する。
3. 運営委員長（1名）と会計（1名）：運営委員長と会計は運営委員の中から互選する。
4. 運営委員会は第4条に記された事業の企画・運営にあたる。

なお、機関誌「社会学部紀要」の編集については運営委員会内に複数の委員をもって構成される編集委員会を置く。編集委員長は、運営委員長が兼ねることがある。

5. 会計監査(2名)：会計監査は普通会員の中から互選する。

6. 書記は社会学部事務長に委嘱する。

#### 第7条

本研究会委員の任期は2年とする。重任を妨げない。

### 第5章 総 会

#### 第8条

総会は定期総会と臨時総会とし、会長が主宰する。定期総会は毎年一回開催され、臨時総会は会長が必要と認めたととき、あるいは普通会員の1/2以上の要求があった場合に開催される。議決は出席者の過半数をもって行う。

#### 第9条

総会の承認を必要とするものは第6条第1項のほか、次の事項とする。

1. 事業計画および収支予算
2. 事業報告および収支決算
3. その他運営委員会において必要と認めた事項

### 第6章 会 計

#### 第10条

本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

#### 第11条

本会の経費は次の収入をもってあてる。

1. 会 費  
普通会員年額 31,200円  
賛助会員年額 10,000円
2. 寄付および補助助成による金品
3. その他の収入

#### 第12条

本会員および本学社会学部大学院学生・大学院研究員並びに学部学生は機関誌の配布を受ける。学生の購読費は年間2,600円とする。

### 付 則

#### 第1条

本会の事業運営に必要な諸規定は、運営委員会の議を経て別に定めることができる。

#### 第2条

本会の会則変更および本会の解散、ならびに、これに伴う財産の処分等については、総会において、出席者の2/3以上の同意を得ることを要する。

#### 第3条

本会則は1992年4月1日より施行する。



## 「社会学部紀要」編集内規

1992年4月1日施行

1996年10月23日改正

1. 「社会学部紀要」(以下、本紀要という)は原則として、当該年度中に2回発行する。6月末を締切日とする号は10月上旬の配布を、11月末日を締切日とする号は3月25日の配布を目標とする。
2. 本紀要の企画、編集、発行は社会学部研究会「社会学部紀要」編集委員会がおこなう。
3. 本紀要に掲載される原稿の種類は以下に掲げるものとする。
  - ①原著
  - ②研究ノート
  - ③学部および社会学部研究会主催、共催の講演会の講演原稿
  - ④書評、内外の学術研究、学術集会の動向の紹介
  - ⑤社会学部最優秀卒業論文賞(安田賞)受賞論文
  - ⑥その他編集委員会が必要と認めた記事
4. 本紀要への投稿有資格者は社会学部研究会名誉会員、ならびに普通会员とする。なお、共同執筆者は名誉会員あるいは普通会员の推薦を受けた者、名誉会員あるいは普通会员と共同研究をおこなった者とする。
 

上記以外の投稿者に関しては普通会员による推薦と編集委員会の審査を経て2名を限度として掲載することができる。

大学院学生ならびに研究員単独の論文原稿の掲載に関しては、普通会员による推薦と編集委員会の審査を経て決定する。
5. 原稿の執筆に際しては、以下の様式に従うものとする。
  - ①原著については、原則として図表、写真を含めて200字詰め原稿用紙100枚以内、研究ノートについては原則として図表、写真を含めて200字詰め原稿用紙60枚以内とする。ワードプロセッサによる原稿については字数においてそれらに相当する分量とする。
  - ②手書き原稿に用いる原稿用紙は研究会指定の200字詰め横書き原稿用紙とする。
  - ③図表、写真等は題字、説明つきですべて本文とは別紙とし、本文中に挿入する個所を本文欄外に指示すること。
 

図表・写真等の費用は50,000円を限度として社会学部研究会が負担するが、それを超える分は執筆者の負担とする。
  - ④原稿には和文および英文の表題、さらに欧文の要約をつける。また執筆者名、所属機関名についても同様とする。
  - ⑤原稿に3語のキーワードをつける。
6. 本紀要に発表する原著論文、研究ノートは他に未発表のもの、または学会大会等での口頭発表の主題をその学会等の了解のもとに原稿にまとめたものに限られる。
7. 外国語による原稿については編集委員会において審議の上、許可することがある。分量は日本語原稿の場合に準ずるものとする。
8. 編集委員会が依頼した外国語原稿を翻訳して掲載する場合には、その翻訳者に対し翻訳料を支払うものとする。その金額については社会学部研究会運営委員会で審議の上決定する。
9. 本紀要に掲載された論文等は無断で他の雑誌等に転載することを禁ずる。
 

また、執筆者がすでに外国語または日本語で発表した論文等を日本語または外国語に翻訳して掲載を希望する場合には、編集委員会において審議のうえ、それを許可することがある。ただし、この場合、著作権処理に関する責任は全て執筆者が負うものとする。その場合の翻訳料は支払わない。
10. 本紀要の執筆者に対しては本誌1部と抜刷100部を無料で配布する。ただし、それ以上の抜刷を希望する場合、その実費は本人の負担とする。
11. 発行された紀要は名誉会員、普通会员、大学院学生、大学院研究員および学生に配布する。その年度の非常勤講師にも配布する。また、本紀要は上記以外の者に頒布することができる。なお、頒布料は原則として学生の購読料と同額とする。
12. この編集内規は研究会運営委員会の議を経て変更することがある。ただし、その変更はその年度の社会学部研究会総会で報告されなければならない。

＜編集後記＞

この3月には、杉山貞夫教授、張光夫教授、船本弘毅教授が定年退職されますので、記念号をお届けいたします。今号は「杉山貞夫教授の定年退職記念号」として発行します。杉山先生は1961年4月に本学社会学部に着任以来、38年間の永きにわたって学部の教育や研究ならびに関西学院大学の発展に尽くしてこられました。先生の多方面にわたる貢献につきましては本書掲載の先生の略歴をご参照願います。先生におかれましては、どうぞこれからもご健康にご留意されて、ますますのご活躍を祈念いたします。

この記念号にご寄稿下さいました先生方、執筆者の方々に感謝申し上げます。また、いつものことながら、今号も煩雑な刊行実務を学部事務室の湯原陽里香主事に担当していただきました。ここに記して感謝いたします。（浅野）

1998年3月10日 印刷

1998年3月20日 発行

編集発行人 牧 正 英

発行所 関西学院大学社会学部研究会

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町

関西学院大学社会学部内

電話(0798)(54)6202

印刷所 尼崎印刷株式会社

〒661-0975 尼崎市下坂部3丁目9番20号

電話 (06)494-1122(代)

**KWANSEI GAKUIN**

**SOCIOLOGY DEPARTMENT STUDIES**

(SHAKAIGAKUBU-KIYO, KWANSEI GAKUIN DAIGAKU)

---

No. 79

March 1998

---

---

The Study Association of Sociology Department

**KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY**

Nishinomiya, Japan

---